View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

林芙美子の「満州」体験

――紀行文「凍れる大地」を中心に――

曾　婷　婷

はじめに

「宿命的な放浪者」と呼ばれる林芙美子（一九〇三～一九五一）の年譜(1)を見ると、日本国内はもとより、台湾、中国大陸、フランス、イギリスなど、いろいろな所へ足を運んだり、滞在したりしていて、その旅の多さと多彩さに驚かされる。

林芙美子は生涯にわたって十回海外(2)へ行ったことがある（付録表一）。プライベートな旅もあれば、ペン部隊の一員として戦場へ赴き、文化使節として軍隊慰問に行くような従軍・仕事関係の渡航もある。この十回の海外体験のうち、通過した地域も含めると、中国大陸は七回であり、軍事関係の南京行き、漢口一番乗り、「満州」(3)の慰問を除くと、四回は個人的な旅行で、いずれも「満州」をコースの中に入れている。

滞在期間（付録表二）からみると、一九四〇年の北満旅行が一月五日から二月三日までで、一番長いのである。その体験を綴った「凍れる大地」は一九四〇年実業之日本社の『新女苑』四月号（図1）に発表された。しかし、『実

図1

『新女苑』昭和一五年四月特別号（装画・小磯良平）

業之日本社百年史』によると、「『新女苑』に載った林芙美子の「凍れる大地」（図2）が、「王道楽土の満州を、〝凍れる大地〟とは何事か」と、陸軍報道部の鈴木庫三中佐から厳重な抗議を受けた」(4)と記されている。出版統制は強化され、婦人雑誌の記事検閲を皮切りに、娯楽誌、児童誌へと、内務省の「雑誌浄化運動」が進んだ一九四〇年前後は言論自由のない時代であった。恐らくその軍の顰蹙を買ったからだろうか、一九四一年一月に出版された林芙美子の『随筆』（秩父書房）

図2

陸軍報道部から厳重な抗議を受けた林芙美子の「凍れる大地」（『新女苑』昭和一五年四月号）

に所収された同作品は「満州――冬の満州紀行」に改題された。その後、中公文庫が出版した『戦線』（二〇〇六年七月）に併録される「凍れる大地」のほかには、筆者の調べる限りでは、文泉堂版全集をはじめ、どの全集にも収録されていない、単行本への収録もないようである。

にもかかわらず、今川英子がこの作品を以下のように高く評価している。「この紀行文にはかつての自由奔放で闊達な描写はみられない。季節が極寒の満州ということもあろうが、従軍を経て、芙美子の感性は情緒性のかったものから思索的なものへと変化している」(5)。本稿の課題は、この紀行文「凍れる大地」を手がかりにしながら、林芙美子の四回目の「満州」旅行を改めて考えていくことにある。極寒の「北満」へ渡る林芙美子の動機は何か、彼女の目に映じた「満州」はどんな風景を呈したのか、そこにいる日本人はまたどんな生活をしたのか、林芙美子の当時の「満州」に対する認識のありようを検討し、さらに「満州」を始め、日本の植民地に対する彼女の思索にも触れてみたいと思う。

一、凍れる大地に求めたもの

1、十年ぶりの「北満」

ここで林芙美子の「満州」体験の経緯について、ひとまずまとめておく。一九三〇年七月、改造社より新鋭文学叢書の一冊である『放浪記』が刊行され、非常な好評を博し、ベストセラーとなり、林芙美子は文壇に躍り出たのである。その印税で生涯初めての中国旅行を実現した。八月二〇日から一ヶ月の旅行を終えて、一一月に発表した「哈爾賓散歩」（『改造』一九三〇年一一月）に「満州では北方がいい、無論、その中にハルピンがあるから、又来年は冬のハルピンを見に行かうと思つてゐる」(6)と結んだ。そして、翌一九三一年一一月に、本当にそう願っていたように、ハ

ルピンを経由して、巴里への旅に出かけた。三回目の一九三六年の中国旅行は主に北京に滞在したので、それについての紀行文は北京を中心にするものが殆どである。「満州」についての言説は調べる限りでは見つからないので、言及することができないが、「凍れる大地」にある「片田舎のような淋しい長春時代から、現在、人口十万になっている新京のこの発展した大都会の歴史は、十年の歳月を経て眺めただけに、私には明日の見物が愉しみなおもいである。」（傍点は筆者　以下同）(7)という一文から推測すると、一九三六年の旅において、彼女は北京へ行くには、長春・ハルピンなど「満州」の北の方ではなく、南を経由しただけかもしれない。

一九四〇年の四回目の「満州」旅行は正確に言えば、「北満」である。林芙美子が訪れた町は、主に新京（長春）・牡丹江・佳木斯・宝清・綏芬河などで、いずれも「満州」の北にある、冬は寒さがとても厳しいところである。林芙美子が一月という「満州」の一番寒い時期に旅に出掛けたのはなぜか、そもそもの動機について探っていきたい。

> 新京がまだ長春と云つてゐる頃、昭和三年の夏から秋へかけて、私は満州を旅行した事がある。考えてみれば、私が満州へ来たのも古い話だ（二九六頁）

ここにある「昭和三年」はミス印刷か、芙美子が作ったフィクションかが判明できないが、事実ではない。はじめて「満州」を訪れたのは昭和五年（一九三〇年）である。一九三〇年から一九四〇年、「十年の光陰が矢の如き」（二九四頁）、「満州国」が建国される前、「新京がまだ長春と云つた」と林芙美子が深く回想したように、変遷した長春、更に北の「満州」を見たいことはまずこの旅行の動機の一つと言えよう。

2、「北満」にいる日本人への関心

一九四〇年一月七日の『満州日日新聞』では「本当の満州は冬に見るべし　林芙美子来満」という記事で、林芙美子の渡満が報じられた。「私は冬行つてこそ本当の満州が判るのではないかと考えてゐます、今度は各移民地の生活や厳寒の国境で働く兵隊さんたちと生活を一緒にしてその苦労を味わいたいと考えてゐます」と林芙美子が自ら語った。

『満州年鑑』（日本図書センター　一九九九年）によると、一九三六年八月、広田弘毅内閣は対満移民政策「二〇箇年百万戸開拓民送出計画」など七大重要国策を決定し、移民団が各地で結成され、農業研修や軍事訓練を受け、「北辺守備」という目的もあって「満州開拓武装移民団（満蒙開拓団）」としてソ満国境の「満州」に配備された。移民地は、ソ満国境や満州中核都市の外縁部が多い。また、中日戦争の戦火が拡大するにつれ、徴兵前の少年が満蒙開拓青少年義勇軍として「満州」にも送り出された。彼らは農業実習とともに軍事教練を受け、軍事的観点から主にソ連国境に近い満州北部が入植先に選ばれた。

こうして、「満州」の植民地化が進められる中、様々な日本人がこの政策に組み込まれて、「北満」に移住した。林芙美子の旅行行程（付録表二）から見ると、この移住民たちの生活現状を視察することを彼女が既に意識の中に入れていたことが分かる。ただ、それは、仕事でもなく、軍事関係でもなく、個人的な視察である。「私は今度の旅行では、材料をあつめるとか、人からきき書きとかはすまいとおもつた。一旅行者としての自分の歩いた道だけを書いてみたい」（三〇〇頁）と彼女は願っている。

3、旅による精神純化の追求

私はこのごろの弱まつた気持ちや、懶惰な生活に溺れてゐる事を反省するために、寒気厳しい北満の風土や生活を、誰にも案内をされないで、私は私の目で私の心でだけじつと視察して来ようと本当は考へてゐるのであつた。（二九三頁）

「凍れる大地」が始まったところにある記述である。反省すべき「弱まった気持ち」、「懶惰な生活」とは何かということを知るために、ここで、旅行が実現した直前の一九三九年という段階の芙美子の実像を再確認しておくことにしよう。

一九三七年七月七日、日本が北京南西郊外で盧溝橋事件を引き起こし、日中全面戦争が勃発した。そんな中、林芙美子は二回中国戦場へ赴いた。まず、一九三七年一二月三一日の南京陥落に際して、「毎日新聞」の特派員として現地を視察した。翌一九三八年九月に「ペン部隊」の一員として上海に渡った後、一〇月に「漢口一番乗り」を果たして、一躍メディアのスターに躍り出た。その従軍活動は、「戦線」「北岸部隊」を産んだ。女流作家として、注目を浴びたが、日中戦争開始から二年を経た、「北満州」旅行の直前一九三九年一一月に刊行した随筆集『心境と風格』（創元社）に収められた「事変の思い出」の冒頭にはこんな言葉がある。

事変も二周年をむかへたけれど、此頃になつて、私は妙に不安なものを感じて仕方がない。新聞を読んでも、どの新聞にも熱意がないし、政府は国民に命令ばかりしてゐるやうである。…（中略）…精動とか、国民精神総動員とか、むつかしい言葉ばかり生まれて来てゐる。…（中略）…私の家も主人が出征して二周年を迎へた。…（中略）…漢口が陥落したら、この戦ひも一息だろうと思つてゐたけれど、武漢攻略になつてからも、広東、海南島、汕頭、と戦況はめざましく進んでいつてゐる。(8)

長く続いた戦争に対して、林芙美子は不安と嫌悪感を持ち始めることが一瞥できる。漢口攻略戦はひとまず日本軍の勝利のうちに終わって、それを契機として、三五歳の林芙美子も人気の絶頂に登りつめる。しかし、日本側の短期決着の計画ははずれ、この日中戦争は長期戦に突入してしまったのである。戦争に対する疑問やネガティブな感情が彼女には芽生え始め、戦争がもたらした一種のもどかしさが既に存在していた。彼女は極寒の「満州」へ旅に出たのである。「凍れる大地」にはこんな一節がある。

私はチンダルの「氷河」を思い出して、樹海のやうな大森林が、白く凍つてゐる姿を見たいと思つた。体の健康はあまり良い方ではなかつたけれども、私の心の中の宿命とでも云ふやうな、破れるやうな感傷が、私に天なり命なりの情熱を波立たせてくれる。私は地図を眺めながら、何の悲哀も沸いて来ないのに瞼を涙で熱くしてゐた。(三〇六頁)

北極の河と平原が酷烈な氷に閉ざされる記録であるチンダル『氷河』という作品を思い出し、中にある「一人の科学者が、氷河の遅遅とした流れを研究する為に、二年も三年も氷河を見守つてゐる」生活に林芙美子は感動を覚えている。その涙は感動と感傷に溢れる情熱の涙である。その情熱は、一面に白く凍っている樹海のような大森林という大自然への畏敬、更にそこにいる科学者という人間への尊敬によって沸いてきたのであろう。

一九三四年六月中旬、樺太から北海道にかけての旅を綴った「摩周湖紀行」(9)で、林芙美子は「私は此一月あまりの北への旅で、何だか、湖と平野と沼地と森林ばかりを見てくらしてゐるやうだ。陽気になりつつある」(10)と旅を振り返った。北方、森林――北海道と「満州」はこの二点で連動するようになり、林芙美子に感銘を与えた。野乃宮紀子がこの「摩周湖紀行」を評価する時、「旅は、林芙美子にとって必要不可欠であった。旅は、日常の中で付着した雑念やしがらみと言った不純物を、さっぱり洗い流してくれる浄化作用なのである。」(11)とその感銘の根元を指摘して

いる。

「列風だの、流水だの、雨、雪、厳しい寒気、そんなものが、暖国に生まれた私達の神経にどのやうな「作用」をするか」（三〇七頁）ということを求めて、「いま、一番寒い、ものみな凍れる真冬の満州に来てゐる。行けるところまで、東部の土地々々を歩いてみたい」（三〇七頁）と彼女は思った。暖国にいる林芙美子は厳寒の「満州」の旅に出かけた。二年間続いていた戦争がもたらしたもどかしさによって生じた「弱まった気持ち」、「懶惰な生活」を反省し、自分を取り戻そうとする旅でもある。

二、「満州」の風物

1、極寒の大地を味わう

「急に薄荷水の中へ顔をつつこんだやうに、眼から鼻から涙や鼻水が出てくる」（二九四頁）、「頬には針でさすような寒気を感じた」（三〇一頁）のような描写から、極寒の「満州」が想像できる。宝清を訪れた一月一八日の気温は零下二七度である（三二二頁）と「凍れる大地」で記録されている。林芙美子はその寒さに慣れることができずに、風邪を引いたり、空気が乾燥し、喉が痛くなり、目が濁ったりもした。にもかかわらず、彼女は「満州」の寒さを心で味わった。

この部屋では、二重の間を冷蔵庫代用に使つておられたけれど、サイダーなんか、この窓へ出して置くと、すぐガラガラに凍りついてしまふ。スチームで熱つぽくなつてゐる時に、この凍つたサイダー瓶をガラガラ鳴しながら飲むのはとても愉しいものだ。（三二七頁）

寒い「満州」ならではのサイダーの飲み方を彼女は愉しく体験している。「氷結している厳しい寒さの此地方に非常に魅力を持つた」（三〇六頁）と彼女は言っていた。そして、春の訪れが一層ありがたく「希望」のようなものとして感じられる。

夏になつて、この凍れる地下十尺の底から噴き上げる草木の色彩の美しさはどんなに鮮やかで美しい事であろうか。松花江、嫩江流域の大平野の緑は、長い冬を越えた満州の人々には、随分待ち遠しい、大きな「希望」であろうと思う。（三〇七頁）

花々の咲く春のころには、この厳しい酷烈な凍れる大地が、どのような変貌を示すかが見たいと思う。地の底深く凍った大地から、芽を吹く花々の花瓣の色はさだめし美しいことであろうと想像される。（三四一頁）

凍れる大地がぬるむと、活気と色彩に満ちる大地の変貌を何回も林芙美子は想像した。「坦々として、自分の生活を生活してゐる満人の世界は、旅行者の私には何かしら魅力を感じる。暖くなる日を待つて生活してゐる民衆の強さは、将来どんな風な結果を生むであろうか」（三一三頁）と、厳しい自然と闘いながら、この地に代々継いで生き抜いてきた中国人の強さも芙美子は素直に賛美している。

一方、満州の土地は、「あらゆる民族を蹴散らして残忍な、無限流露の地貌を表してゐる」（三〇七頁）と芙美子は形容している。このような満州の「自然風物の歴史を研究しないで、隣りの馬にでも乗りうつるやうな気楽さでは大変な眼にあふのではないだらうか。寒暑の差の厳しいこの大自然は、仲々油断のならない汗馬だとも思ふ。」（三〇七頁）と満州の厳しさが述べられる。代々生き継いだ中国人に比べ、満州の歴史や風土も研究しないで、新しくやってきた日本人はきっといろいろ苦労するだろうと芙美子は予言している。「王道楽土の満州を、〝凍れる大地〟とは何事

か」と、陸軍報道部から抗議を受けたのもこれと関係あるのであろう。

2、松花江――「満州」の大動脈

・「河を持つた街は魅力がある。」（三〇四頁）
・「水のある土地には希望がある。」（三一八頁）
・「河のある都会は私は好きだ。」（三四一頁）

林芙美子は「凍れる大地」において、河への愛着を何回も語った。その河は「松花江」のことである。むかし、この地に入ったロシア人がスンガリと呼んだ。第二次世界大戦前の日本、殊に「満州国」時代の日本人の間でもスンガリ川の名で知られている（フリー百科事典により）。一九三〇年の中国大陸旅行を綴った紀行文「愉快なる地図――大陸への一人旅」（『女人芸術』一九三〇年一一月）においても、林芙美子が「スンガリ（松花江）の向うの太陽島の別荘地帯」[12]と、「スンガリ」という呼び方を用い、「松花江」と括弧をつけて説明した記述がある。

また、フリー百科事典では、「大きな船の航行が可能な国際河川で、中国東北部の物流の幹線でもある。流域には吉林市、ハルビン市、ジャムス市などの大都会を有し」と松花江の概観、沿岸の三大都市が紹介されている。

この河はまずハルビンを流れている（前節「十年ぶりの北満」）。また、「凍れる大地」の最後では、綏芬河に向うとき、「私はまた、松花江の佳木斯へ逆もどりをしたいやうな気持ちであつた」（三四一頁）と、松花江への未練を綴っていた。

もう一つの都市「吉林市」は筆者の故郷であり、人々に愛される松花江が流れているから、「江城」とも呼ばれる。小さいときから、松花江に馴染み、成長してきた筆者が、「凍れる大地」を読んだとき、林芙美子の研究者、今川英

子氏が「研究をすすめていくと、不思議なほどに、様々な縁や出会いがあり、広がっています。」[13]と述べたことを思い出し、より深く関心をもつようになった。吉林市には、林芙美子が実際に行ったことのある証拠がないのだが、この「北満」旅行がなされた同一九四〇年の一月から一二月にかけて、「婦人公論」に連載した小説「十年間」では、「吉林市」は、大学を出て、日本で就職できず、仕方なく「満州」へ流れて行く主人公鉄雄の勤め先として登場した。鉄雄ははじめ吉林市の近くの蛟河（現吉林市の四県級市の一つ、松花江と紅葉で知られている）の「満鮮材木会社出張所」で働き、三年後吉林市に転任した。

鉄雄は吉林が好きであった。周囲は山で繞らされて、天然の都邑として、ここは古くからの美しい土地である。水路としては松花江が悠々として流れていた。この松花江から流す材木は、…（中略）…何億万石と推定されるほどの豊富な量であった[14]

と松花江に対する愛着を林芙美子が主人公に託して描いた。

「凍れる大地」では、林芙美子が「海のような川」、「満州の大動脈」などの表現を用い、松花江の姿を鮮やかに浮かび上がらせている。松花江の魅力は河それ自体以外に、その沿岸にある豊饒な農産物、また「松花江では、鯉だの、鱘という魚はよく釣れるということだ。河魚は支那料理にすると独得の味があっておいしい」（三二六頁）とあるように、河に育まれている漁業資源にもある。

「河」「水」という存在には、林芙美子が特別な愛着を持っているようである。「水のある土地には希望がある」と考える林芙美子は、松花江が流れているハルピン・佳木斯・吉林市に比べると、「満州国」の首都新京（長春）について、「河のない長春の今後の発展はのぞめない」と訴え、新京にも「大運河の計画がつくと素晴らしい」（三〇四頁）と提唱した。「街の灯火をうつす河の流れは、どんなに人の心を慰めてくれるであろう。運河ともなれば、荷物の輸

送もできるであろうし、人も市も大繁盛してくれるにちがいないのだ」と、新京での河や大運河の建設を望んでいる。ここには前掲した今川英子氏が指摘した「凍れる大地」にある「思索的なもの」も窺えるであろう。

三、日本開拓民に向けられた芙美子の眼差し

「満州国」は一九三二年九月一八日の満州事変により、中国東北地方を占領した日本が、一九三二年、清朝最後の皇帝溥儀を執政として建国した。一九三二年には建国宣言がなされ、一九四五年八月に崩壊を迎え、実質的に十三年の間しか持たなかった。林芙美子が訪れた一九四〇年という時点で、初めての中国旅行の一九三〇年と翌一九三一年より、「満州」の時局はやや落ち着いており、「明日の歴史はわからないけれど、兎に角、いまは何処へ旅をしても、満州では不安だと思う土地はない」（三一九頁）とあるように、一ヶ月に渡る旅行が実現した。一九三七年、「満州農業移民二十ヵ年一〇〇万戸送出計画」が閣議決定され、「満州移民」は重要国策になる。ことに中日戦争の戦火が拡大するにつれ、徴兵前の少年が満蒙開拓青少年義勇軍として「満州」に送り出されるようになる。その人達の生活を見ることは、前述したように、林芙美子のこの旅行の動機の一つと見られる。

1、開拓民の衣食住問題

「いままでは、先祖代々住み馴れた満州人」の跡を継いで、現代では「日本から沢山の開拓民の家族が、満州大平原耕作に甲斐々々しく来ているのだ」。（三〇五頁）しかし、昔から坦々と生活してきた「満州人」に比べて、新しくやってきた日本人の方は、様々な面で困難に晒されるに違いないことに林芙美子が気づき、例えば衣食住問題について以下の表にまとめられるような感想や意見を述べた。

衣	食	住
（開拓村や青少年義勇軍で有名な勃利の駅）（三一三頁） 赤い日本のコートを着た娘さんが、毛皮のついたスリッパのやうな下駄をはいてホームを小走りに歩いてゐた。歩くたびに、腫れたやうなあかいふくらはぎが裾から見えて如何にも寒さうである。日本の女の服装だけは、かうした寒い土地では考えなければならない大切な事だと思ふ。	（新京Dホテル　和食の朝食について、林語堂の文章を思い出し、述べた感想）（三〇三頁） 日本では上流の家庭でなければ料理人を置くことは出来ないけれども、ある意味において、家庭の女に、このやうな食物に就いての心遣いがなければ、まずいものも美しい色や、美しい味に変化するのではないかと思ふ。料理をする心は愛情であり、誠意を持つより方法がない。 （開拓村茨城村）（三三二頁） 内地の大陸の花嫁訓練所では、どのやうな事を教えるのか私は知らないけれども、満州風土の研究はなおさら、食物についての深い知識も大切だと思ふ。酷烈な風土では、その風土に適した料理がある。内地でも、その地方々々で料理が違つてゐる如く、満州にも満州の料理があらう。脂肪の多い支那料理を考えてみると、私はいろいろと考えさせられる処が多いのだ。	（新京）（三〇一頁） 新京は家のない都会と云う感がしてならなかつた。「市井」とか「陋巷」と云ったなごやかなつつましい市民の住宅が少しもみあたらない。すべてはお役所風な大建築ばかりである。このやうな大建築に務めを持つ人達はいつたい何処に住んでゐるのだらうと思つた。 （牡丹江）（三一二頁） この街にも、小住宅は非常に少ない…（中略）…武林さんの住宅は一番はじつこの家で、なかは三部屋ばかりある。牡丹江では、かうした住宅も中流以上であらう。今日は水道が凍つて出ないのだと云って…（中略）…かうした寒い土地に住む奥様たちの生活も大変な努力だと思ふ。 （佳木斯）（三二九頁） 移住してゆく人達に、この住宅の問題はしつかり考へて行つてもらわなければならないと思ふ。寒暑の差がひどい満州地方では、人間の住宅すらも風土と戦争をしてゐるやうなものだと云えよう。

「開拓村のことも、青少年義勇隊のことも、現在からは、もつと大規模なものに拡大されなければならないと思つてゐるけれども、大規模なしつかりした礎石をつくるには衣食住の問題をいま少しがつしりと考慮されるべきではないかと考へるものだ」。（三三三頁）と、「しつかりした基礎」を造ることを林芙美子は強く主張している。

衣食住だけでなく、佳木斯の近くの追分の義勇隊訓練所を視察した時、「ここは三百人の隊員ださうである。ここにはお医者がなくて、寮母さんという年をとつた女の人が、粉薬を小さい紙に包んでゐた。病気で寝てゐる者もあつた」という状況を目の前にして、「この追分訓練所で求めたいものは、私は、若い寮母と、しつかりした医者と数個の井戸、この三つのものがどうしても欲しいものだと思つた」（三三三頁）と義勇隊の少年達のために呼びかけた。

また、「夏になると、凍つた道が泥濘になつて、トラックも不通になつてしまうのださうで、病気にでもなつたらそれこそ死ぬのを覚悟しなければならない」（三二四頁）という宝清の兵士の話を聞いたとき、林芙美子は胸がいっぱいになってしまった。

実生活から作品の基盤が培われてきた林芙美子は「生活派」[15]と呼ばれるように、生活の基礎となる衣食住問題・医療問題を常に意識し、入植民の生活を身をもって感じている。「満州の自然風物の歴史を研究しないで、隣りの馬にでも乗りうつるやうな気楽さでは大変な眼にあふのではないだらうか。」（三〇七）という言説にもう一回注目すると、日本の開拓民が大変な境地に陥ったのは満州の自然の厳しさだけでなく、日本政府の成熟でない入植政策とも関係する口調が読み取れる。

2、植民地開拓への疑問と批判

日本政府の殖民地開拓に対して、「凍れる大地」という時点においては、批判というより、開拓民生活への不安し

か読み取れないが、戦後発表した「作家の手帳」にある次の言葉を読む限り、その批判する姿勢が明確に読み取れるのであろう。

かつての、日本の満州開拓の事業を考えて見ますと、何だかぞっとするほどの寒気を感じないではいられません。…（中略）…政府が、満州の開拓民の人々にどれだけの責任を負うのでしょうか。日本での土地を手放し、意気に燃えて渡満していった人々が、今度はまた裸で戻ってこなければなりません。その人たちの土地はもう故郷にはないのです。(16)

林芙美子の植民地に関する思考は実はこれより随分前に遡ることができる。一九三四年日本の植民地の樺太への旅行を記述した「樺太への旅」では、「樺太には野山という野山に樹木がない」「行けども行けども墓場の中を行くやうな切株の間から、若い白樺の木がひょうひょう立つてゐる」のを見て、「名刺一枚で広大な土地をもらつて、切りたいだけ樹木を切りたおして売つてしまつた」日本の不在地主が、「樺太の山野を墓場にしておく」(17)と反感的な口調で書いた。

「北満洲」旅行の後、一九四一年太平洋戦争が勃発し、一九四二年一〇月、林芙美子は報道班員として、南方に派遣され、八ヶ月南方に滞在した。仏印のダラットを背景にし、林芙美子の畢生の大作である『浮雲』においても、富岡という主人公に託して植民地での政府の施策について、反感が述べられた。

富岡は山林事務所の山林官として、毎日森林を歩き回って、伐採の数字を軍に報告する。雄大な山林に面して、

山も湖も、空も亦異郷の地でありながら、仏蘭西人のように、のびのびとこの土地を消化しきれないもどかしさがある。この土地には、日本の片よつた狭い思想なぞは受けつけない広々とした反発がある。おうやうにふるまつてゐても、富岡達の日本人は、この土地では、小さい異物に過ぎないのだ。何の才能もなくて、只、この土地に坐らされてゐる心細さが、富岡が此

頃とくに感じられた。[18]

異国にいる異物と侵略者を兼ねる心細さ、それと、国家が描く野望の儚さと歪みが、富岡には感じられた。

同じ南方体験、オランダの植民地ジャワ島について、井上ひさしが創った、林芙美子の後半生をたどる評伝戯曲――「太鼓たたいて笛ふいて」（『新潮』二〇〇二年九月掲載）において、次の芙美子の台詞に注目したい。

芙美子　開拓民を迎え入れる前に、まず道をつける、次に運河をめぐらす、そして宿舎を建てる。これがオランダ人のやり方なのね。……四郎さんは満州に詳しいわね。

四郎　日本人は勇ましいから、鉄砲と鍬を担いで、どんどん奥地に入っていきますな。

芙美子　そう、道なし、水なし、住むところなし、何もないところへ裸同然のまま人間を放り込むのが日本のやり方よ。[19]

林芙美子が日本の開拓・植民政策に対して批判する姿を井上ひさしは戯曲に求めている。現実の林芙美子も今まで述べてきたように、明確な形でその批判する姿勢を表明したことがあるので、戯曲はフィクションではなく、真実に沿って創られたと言える。

日本政府の入植事業に関しては、樺太、満州、仏印――一連の植民地時代の林芙美子の指摘は彼女の文学を考える時に非常に重視すべきものではないかと思う。

おわりに

「満州」――中国東北地方の旧称。近代日本が本格的に「満州」に進出したのは、日露戦争の「戦果」としてロシアから旅順や長春間の鉄道経営権を勝ち取り、大連を拠点に「南満鉄道株式会社」（満鉄）を設立してからであった。

歴史上には「満州国」（一九三二年～一九四五年）という日本の傀儡国家が存在した。そして、一九三〇年から一九四一年まで林芙美子が五回もこの「満州」を訪れた。

林芙美子文学を考える場合は、彼女の戦争体験はよく言及されている。一九三七年の南京・翌年の漢口攻略視察、一九四二年からの南方徴用、という三つの行動によって、彼女と戦争とを深く結ぶようになったイメージが定着しているようである。しかしながら、それだけでは、林芙美子の戦争体験を考えるのに不十分であるとあえて思う。「満州」という言葉は、彼女の文学において、先行研究を読む限りでは、キーワードから恐らく外れるものと言っていい。それにもかかわらず、杉原正子が「林芙美子の文学の中で、最も多く登場する旧植民地は、圧倒的に「満州」である」[20]と指摘したように、日本のアジア侵略の最前線にある、長い間日本の植民地としての「満州」に対する林芙美子の捉え方を検討することも必要となるのではないかと思う。

私がここで取り上げた「凍れる大地」は、芙美子の代表作・旅行記からおよそ外れるものである。これまで見てきたように、本稿は林芙美子の捉えた「満州」のありようの再現を試みた。植民地をテーマにしていても、戦争協力の林芙美子を批判的に論じようとはしなかったように思われるかもしれないが、日本という支配者・殖民者ならではの林芙美子の綴り方は作品の中に少しもないとは言えないことを最後に付け加えたい。

もし、中国側・日本側という構図を分けて考えると、日本側の描写は中国側より圧倒的に多いことに気づく。このような構成は何を意味しているのであろうか。川本三郎が言った「満州という名のもう一つの日本」[21]という言い方が思い出される。つまり、「満州」という空間はもう外地ではなく、日本の延長線にある、と林芙美子が捉えている。だからこそ、「満州」に移住した日本の開拓民・青年義勇軍の生活状態、新京は国都として運河を造らなければならないような指摘が出るわけである。日本政府・軍部が引いてくれたこの枠組みではなく、むしろその枠組みに囲まれ

ている空間の中に入り込んで、すべてを見ている。歴史的にこの「満州」はどんな存在かという認識は彼女にはまだなかったように思える。

ただ、日本の植民地政策に巻き込まれた日本人を目の前にして、日本の施策に対する批判する姿勢、それと、戦争に対するネガティブな感情が芽生えたことは、筆者が読んだ限りでは、否定できないと思う。このような戦時下の体験を経て、戦後の道筋をどのように切り開こうとしたかというと、「浮雲」をはじめとする彼女の反戦文学へと導いていく。

林芙美子にとっての戦中と戦後、その連続性を考えるにあたって、一九四〇年時点のこの「凍れる大地」は少し示唆を与えてくれたのではないかと思う。

註

(1) 今川英子著林芙美子「年譜」『林芙美子全集（全十六巻）』第十六巻所収、文泉堂一九七七年。

(2) 当時の台湾・「満州」・朝鮮の呼称について、ここではヨーロッパと並べて、一括「海外」とする。林芙美子の十回の海外体験は筆者が調べる限りで、付録一にまとめておく。

(3) 「満州」は今中国の東北三省であり、その呼称について、中国では、日本が傀儡国家として建国した「満州国」を「偽満州国」と称している。本稿では、調査資料が当時に印刷・発行されたものが多いから、当時の呼称をそのまま「　」をつけて使用する。

(4) 『実業之日本社百年史』実業之日本社出版、一九九七年一二月、一五〇頁。

(5) 今川英子「林芙美子のアジア――戦争と南方徴用」『アジア遊学』勉誠出版、二〇〇三年九月、一四六頁。

(6) 「哈爾賓散歩」『改造』改造社、一九三〇年一一月、一〇九頁。

(7) 林芙美子「凍れる大地」『新女苑』実業之日本社出版、一九四〇年四月、三〇〇頁。

本稿における「凍れる大地」からの引用はすべて『新女苑』による。以下は頁数のみ示す。

(8) 「事変の思い出」『心境と風格』創元社、一九三九年一一月、二五八～二五九頁。
「事変の思い出」の初出については、筆者が調べる限りでは、『心境と風格』が出版される前はまだ掲載されていないようで、恐らくその初出は『心境と風格』ではないかとあえて判断する。
(9) 「摩周湖紀行」：初出は『旅たより』林芙美子　一九三四年八月、改造社）。
(10) 前掲『旅だより』一二七頁。
(11) 「摩周湖紀行」『国文学　特集＝旅と文学―北海道』至文堂、二〇〇七年四月、三一頁。
(12) 「愉快なる地図――大陸への一人旅」『女人芸術』不二出版（復刻版）、一九三〇年一一月、五六頁。
(13) 『江古田文学七七号　特集林芙美子没後六〇年』日本大学芸術学部文芸学科、二〇一一年八月、二〇二頁。
(14) 「十年間」『林芙美子全集　第一六巻』文泉堂、九三頁。
(15) 保昌正夫「林芙美子の女性観」『国文学　解釈と鑑賞　特集林芙美子の世界』至文堂、一九九八年二月、五八頁。
(16) 年表によると、「作家の手帳」は一九四六年七～一一月雑誌『紺青』に連載された。ここでの引用は文泉堂版『林芙美子全集　第六巻』の四四頁である。
(17) 「樺太への旅」初出『文芸』改造社、一九三四年八月、一四六頁。
(18) 「浮雲」『林芙美子全集　第一六巻』新潮社、一九五一年、二七頁。
(19) 井上ひさし「太鼓たたいて笛ふいて」『新潮』新潮社、二〇〇二年九月、一〇七頁。
(20) 杉原正子「林芙美子『浮雲』試論」『「昭和」文学史における「満州」の問題　第二』所収　杉野要吉編集　早稲田大学教育学部杉野要吉研究室、一九九四年五月、二〇〇頁。
(21) 川本三郎『林芙美子の昭和』新書館、二〇〇三年二月、二〇七頁。

付録表一――林芙美子海外体験表

一	一九三〇年 一月一日～二月二五日	二七歳	台湾総督府の招きで台湾旅行
二	一九三〇年 八月二〇日～九月二五日	二七歳	『放浪記』の印税で中国大陸への旅行 ハルピン・長春・奉天・撫順・金州・三十里・大連・青島・南京・杭州・蘇州。九月一九日内山完造の紹介で魯迅に会った。
三	一九三一年 一一月～翌年五月	二八歳	朝鮮・「満州」（ハルピンに着くのは一一月一三日）・シベリア経由で渡欧。主としてパリに滞在。 一九三二年一月二三日パリからロンドンへ、 一九三二年二月二五日ロンドンからパリ戻る。 帰国途中の六月二三日に上海に寄り、二回目魯迅に会った
四	一九三六年九月～一〇月	三三歳	自費で『満州』・山海関・北平に遊び、中国スケッチ旅行中の夫・林緑敏と北平で合流。
五	一九三七年一二月	三四歳	南京陥落に際し、「毎日新聞」の特派員となり、上海・南京に赴いた。
六	一九三八年 九月～一二月	三五歳	漢口の攻略を控え、国民の戦意の昂揚をはかるために内閣情報部によって作られた「ペン部隊」の一員として上海に派遣される。上海以後単独行動をとり、「稲葉部隊」に従軍。途中、朝日新聞社のトラックに乗り換え、十一月二二日、漢口に報道記者として一番乗りをした。
七	一九四〇年 一月五日～二月三日	三七歳	「北満」旅行。安東・長春・牡丹江・佳木斯・宝清・綏芬河などを回って見た。
八	一九四〇年一一月	三七歳	新居格・小林秀雄らと朝鮮講演旅行
九	一九四一年 九月一七日～九月二九日	三八歳	朝日新聞社の飛行機による「満州」国境慰問。大仏次郎・窪川（稲多）稲子・横山隆一らと同行。 「満州国」建国一〇周年にあたって、「文芸使節」と呼ばれ、奉天（瀋陽）・新京（長春）・ハルピンを回って、講演を行った。

十	一九四二年一〇月～五月	三九歳	報道班員として、南方に派遣され、仏印、シンガポール、ジャワー、ボルネオなどに八ヶ月滞在、現地人の間で生活した。

注：付録表一は、根拠を以下の三つに置き、作成したのである。
①文泉堂版『林芙美子全集（全十六巻）』第十六巻所収　今川英子著林芙美子「年譜」
②久保卓哉は「林芙美子蔵　魯迅親筆　銭起「帰雁」詩について－これまでの定説と新見解」（福山大学人間文化学部紀要　二〇一〇年三月）
③朝日新聞（北満洲版）一九四九年九月～一〇月一日

付録表二――林芙美子北満旅行行程表

月日	滞在地
一月五日	東京出発
一月六日	九時　下関着 一〇時　関釜連絡船に乗り、下関港発 一八時　釜山港着 一九時　新京行き急行一号「ひかり」に乗り、釜山港発
一月七日	安東（現遼寧省丹東市）着 原ハルピン領事館領事、現安東採木公司の理事八木氏の官邸に訪問する
一月七日～一月九日	安東採木公司の官舎に三日間泊まる 八木氏が関係する製材所と製紙公司を見学する。休養を取る
一月一〇日	正午　新京行き急行一号「ひかり」に乗り、安東発 夜　新京着　朝日新聞記者渡辺氏の宅に一泊泊まる
一月一一日	渡辺氏の案内で新京を見物する。日本橋のDホテル泊

月日	滞在地
一月一二日	昼間　一人で秋林デパートで毛皮を買う 夕方　満鉄の八木秋子氏の案内で宝山デパートで肌着を買う Dホテル泊
一月一三日	二三時四五分　牡丹江行きの汽車に乗り、新京発。 朝日新聞の伝書鳩班松田氏ら五人同行
一月一四日	二〇時頃　牡丹江着　駅前の富士ホテル泊
一月一五日	朝食　大和ホテル 昼から松田氏の自動車で牡丹江を見物する 牡丹江郊外にある軍隊を訪問し、前田少将に会う 牡丹江一泊（富士ホテルかどうか判明できない）
一月一六日	朝　牡丹江を発って、佳木斯に向う。松田氏同行 汽車は昼過ぎ林口、一六時に勃利、一八時頃に彌栄駅に停まり 二一時頃　佳木斯に着。旅館伊勢屋泊
一月一七日	鈴木氏の案内で佳木斯を見物する 夕食は鈴木氏奥さんの手作り料理。旅館伊勢屋泊
一月一八日	七時　鈴木氏と佳木斯飛行場へ。四人乗り小型飛行機で宝清へ 一〇時頃　宝清飛行場着陸　赤木少佐と兵隊が出迎え、赤木少佐官舎へ向う 一一時　鈴木氏と兵舎へ行く。兵舎で木下少佐らと昼食 午後　陸軍病院で塩加井中佐に咽喉利リゴールを塗ってもらう 協和主催の座談会に出る。 陸軍病院で講演 夕食　赤木少佐の官舎 夕食後　鷹亭の前の旅館の広間で協和会主催の町の座談会に出席 九時頃　赤木官舎に戻り、泊まる

月日	滞在地
一月一九日	朝食　赤木官舎 一〇時四〇分　宝清飛行場離陸　佳木斯へ 一一時五〇分　佳木斯飛行場着陸 夕食　鈴木夫妻の部屋　大陸ホテル泊
一月二〇日	佳木斯の街を回る。忠霊塔を参る。公認の賭博場にも入ってみる 松花江を渡って、連江口、岩城村、茨城村などの開拓村を視察した 大陸ホテル泊
一月二一日	午前　佳木斯から一時間かかる追分にある青年義勇隊を夕方まで視察した 夕方　彌栄村へ。彌栄村をしばらく歩き、福島氏や村長の話から、開拓村にある青春的な精神力を感じる 夜　佳木斯へ戻る。大陸ホテル泊
一月二二日	昼間は大陸ホテルで過ごし、夕方、買い物に行く　大陸ホテル泊
一月二三日	九時　汽車で佳木斯を発つ 二一時頃　牡丹江着。駅前の富士ホテル泊
一月二四日	牡丹江の街を回る。富士ホテル泊
一月二五日	八時　牡丹江発、綏芬河へ
一月二五日以降	「凍れる大地」は未完で終っているので、二月三日に東京へ戻るまでの行程は未詳

注：付録表二は、根拠を以下の二つに置き、作成した。
①林芙美子「凍れる大地」『新女苑』一九四〇年四月号
②久保卓哉は林芙美子と凍れる大地―満州宝清への旅」（福山大学人間文化学部紀要二〇一一年三月）
該論文は、林芙美子のこの四回目の満州旅行の旅程を明らかにした上で、芙美子が訪れた宝清という町に自ら入って真実に迫って調査を行った。

（ソ　テイテイ・吉林大学（中国・長春）外国語学院講師）